現代建築における人間性に関する一考察

細　田　育　宏

(A View on the Humanity in Contemporary Architecture, by Yasuhiro Hosoda)

目　次

序
第一章　現代建築における合理性の問題
　第一節　合　理　性
　第二節　合理主義建築思潮
第二章　現代建築における機能性の問題
　第一節　機　能　性
　第二節　機能主義建築思潮
第三章　現代建築における国際性の問題
　第一節　国　際　性
　第二節　国際主義建築思潮とヒューマニズム
第四章　現代建築における人間性の問題
　第一節　建築とヒューマニズム
　第二節　現代建築におけるヒューマニズムの方向
註

序

歴史学の立場では当時代の出来事は凡そ50年は経過しなければその史的意義は明らかに出来ないと云われている。かゝる見解に立てば私が今こゝで現代建築を考察するにしても建築史的には的確さを欠くものとなるかもしれない。然し現代的な建築の新しい出来事がそれまでとは著しく異なつたものを生み出したし，それを現代に立つての批判は可能である。しかも「現代」と云う歴史的位置に生きている我々が近代の連続として現代をある観点からとらえる事が可能だと云う基盤に立つ時，現代建築を大いに反省し，分析し，批判し，絶えず生長する現代を更に一層よりよき創造的価値実現の為の考察が必要になつてくるのである。それはとりもなおさず現代建築における「人間性欠如」の問題である。本稿ではかゝる問題意識に立つてこれに対する追求を試みようと思つているが，その順序として20世紀初頭前後頃から一応確立されてきた建築の合理性・機能性・国際性をそれぞれの社会的・歴史的思潮をバツクにして成立した建

築の主義・思潮と合せて論述し，それらの主義・思潮がそれ自体を実質上究極の目的原理とするところに建築の現代的問題が存在することを指摘し，よりよき現代建築創造の為には結局現代的ヒューマニズムに立脚しなければならない事を明らかにしたいと思う。かつて史上幾度か人間性は問題にされた。然しそれをそのまゝ現代のヒュマニズムに置きかえる事は出来ない。それは現代的に再構成して考えられなければならない。

（私自身この研究を始めてから日未だ浅く又紙数も限定されているので，意に満たない点が多々ある事と思う故，諸兄の卒直な御批判を仰ぎたい一念である。）

第一章　現代建築における合理性の問題

第一節　合　理　性

現代建築の合理性の問題は住生活の合理化の問題を含み，更にそれは現代建築創造における合理的精神の問題につながるものであろう。現代建築はある目的に対して最も純粋に直接満足を与える様に考えられる事が一つの特色であると云える。その目的とは即ち住行為と云う建築の持つ目的である。かゝる目的の実現のために必要とする手段及びその手段の選択・利用の仕方として「技術」が問題になる。技術は目的に対する手段の適合関係とその手段の適用による有効なる成果の期待と云う二つの契機の統合体として理解される。技術は科学的・理論的法則体系の中に位置している。有効なる成果の期待とは実用的合目的性で経済性を根本としている。一切の非実用的要素を除去し建築の実用性の追求こそ建築における合理性の問題である。建築を社会的歴史的にとらえてみるとそれに即応したかの様な種々な様式（style）がみられる。然しこれらの様式はその時代には確かに最も現代的とうたわれたものであろうけれども，現代としてはもはや実用的な意義を失つているものである。これは社会的耐用性と物的耐用性のテンポの相違によるもので，過去のある時代に，その時代なりの社会的情況を背景にして建てられたものが，時代の経過により物質的には未だに現存していても，社会的には耐用性を失つて行く事を物語つている。過去の生活感情と現代のそれとに大きな変化を認め，かゝる現代の情況を合理的に把握した建築の実現をはからなければならない。現代建築は機械の大量生産によつてその材料や部品のロー・コストをはかり，更に工場生産の現場組立のプレファブ構法（Prefabricated Housing）は経済的合理化のあらわれに他ならない。ブロック（Concrete Block）による建築は煉瓦建築の現代版と見る事が出来よう。又鉄・セメント・ガラス等の新建築材料から更にプラスチック製品の建築応用などに見られる様に科学的合理性は益々深められている。この様に近代科学の生んだ新しい建築材料の進歩，構造の工学的発達とそれらの生産技術等における所の近代的科学的合理性の追求は建築に一層現代としての新たな問題意識を必要とし，そこからは必然的に過去の様式・伝統からの断絶を見るに至るのである。玄関は何式だ，客間はこうするものだ，台所便所なんか一番後の問題だと云つた建築に対する前近代的な因襲的な態度は建築の本来の目的意識から離れ，その中に住む人間の虚栄的自尊心を満足させるような威厳・格式・尊厳等の尊重保持をしつゞけていた。(1)それはあたかも一種の信仰的

なものであり合理的には理解不可能のものである。ましてや建築の家相判断に至つては極度に迷蒙な神秘的なものと云わなくてはならない。

かように現代建築における合理性は建築それ自体のもつ目的に対して科学的技術の法則性に基づく合理的精神として位置づけらなるのであつて，しかも過去の伝統的・因襲的・歴史的・社会的な非合理性を打破し，啓蒙し，同時に新たな非合理性に直面してそれの合理的解決がなされる事にこそその意義があると云えよう。

第二節　合理主義建築思潮

現代建築の合理性を基礎づける建築思潮として先ず「合理主義建築」(Rationalistic Architecture) をとりあげなければならないが，現代における合理的精神が建築界において位置をしめる様になつた要因として近世の思想的傾向と科学的発達とを基底とする近世文化から求められなければならないだろう。

19世紀末の科学技術による各種の新発明と新発見は思想界にも実証主義と唯物論的世界観をもたらし，もはや古典への空想も中世への夢想も魅力がなくなり，すべて歴史的なるものからの覇絆から解放されてただ自然と現実に即して人生を見，芸術においては自然主義的乃至現実主義的傾向を示して来た。これが建築においては，近代科学及び工業の進歩による新建築材料として鉄とセメントとガラスの生産の発展と，更に鉄筋鉄骨コンクリート構造法が過去の石や煉瓦などの構成材料とは全然性格を異にして過去において不可能な構造の多くもこれによつて新しい構造を可能にし，又その優れた点が認められ，しかも鉄やセメント，ガラスなどを素材とする新建築構成美の認識がなされるに至つたのである。即ち新時代の建築は新材料による新構造の科学的合理性の追求と云う形態をとるのであるが，かゝる合理的建築思潮として先ず19世紀末期に欧州において，過去の歴史的様式から全く離れて新しい建築材料たる鉄やガラス等による表現をしたアール・ヌーボー (L' Art Noveau) に端を発したと見る事が出来るが然し当時の芸術界の自然主義的思潮に歩調を合せて，動植物の形態の写実的表現の奔放な曲線の駆使のため徒らに煩雑に流れ，鉄やガラス等の科学的性質と相入れないものがあつたためやがて20世紀初頭を絶頂として衰退していつたのである。アール・ヌーボーが伝統から脱皮して合理主義的傾向に入つたのに，新材料の構法に不認識の点があつたと云う欠陥を留意してこの主張を更に推し進めたのが「分離派」，(Secession) の思潮である。この運動の巨匠，墺のオツトー・ワグナー (Otto Wagner, 1841—1918) は建築家のとるべき態度として先ず建築の目的の把握と充足から始まり，加工性・耐久性・経済性を考慮した新材料の選定，そして簡潔にして経済的な構造を目標としてあげ，所謂実用主義建築を主張して多くの設計をしたが，かゝる思潮は欧州を始め世界各地に行き渡り，合理・合目的性を強調する現代建築の基礎をきずいたものと云える。(2)この分離派建築運動を更に押し進めて，建築は構造物の力学的・数理的な解答を追求することにありとする独のペーター・ベーレンス (Peter Behrenrs, 1868—1940) らを中心とする構造派 (Structural Rationalism) の建築は科学至上主義の現れであり，建築における唯物

論的理念の典型的なものである。仏のペレー兄弟（Auguste Perret, 1874, — Gustave Perret, 1876—）は1903年に既にコンクリート打放しの建築をパリーに完成しているが，これは今日我国でも見られる構造である。これについて彼は次の如く述べている。

「施工の立派なコンクリート，特に磨きをかけたコンクリート面は，諸材料の中で最も美しく硬く，耐久性のある花崗石に匹敵させる事が出来る。」(3)ベーレンスの門下より出た独のグロピウス（Walter Gropius, 1883—）は現代工業を基盤とする工業建築を極めて進歩的な合理主義建築を推進せしめた。彼の合理主義建築についての現代的な意義は科学的・経済的・工業的建築の大量生産方式にある。それは住宅の工業化，規格化による乾式組立構造（Trockenmontagebau）の提案をし（1927年）(4) 更にそれは「一住居は大量の，一般の需要が問題なのだ」と云う思想にある如く「標準型」乃至は規格による繰り返しによつて形成される都市の住宅であつた。(5)これは工場製品の現場組み立てである為塗壁がないから水を使わず，従つて工期が短縮される。即ち労力・時間と共に経済的に建築されると云う合理性をもち，今日言うプレファブ構法の先駆をなすものである。

以上合理主義建築思潮の概観を試みたが，建築と云うものが構造力学的に数理的に計算によつて基礎づけられる面があつても，それをもつて建築創造の目的原理とするところに建築の美的価値を黙殺し，それは必然的に目性性への単純化，メカニツクな非人間的スタイルを発展させ，建築が理性的・感性的な全体的人間の住むものであるにかゝわらず，その一面的・抽象的な欠陥を強化するに至るのである。本節ではかゝる問題点を指摘するに止まり論を進めるに従つて次第に明らかにしたいと思う。

第二章　現代建築における機能性の問題

第一節　機　能　性

機能（Function）とは一般に相互依存関係にある部分からなる全体（Total）において，それぞその因子（Factor）の果すべき「役割」及びこの様な諸因子の協同関係から結果する全体の「働き」を意味している。これを建築において考えれば，建築における諸設備を含めた諸空間の果すべき役割であり，かつそれは同時に相互依存関係においてとらえられ，これらの諸空間の全体的働きである。生物体における諸器官，機械における諸機関，或いは団体における諸機構等の役目に相応する物で，これらの諸因子がいかに全体的に統合されるによつてその働きは価値づけられるであろう。そしてこれらの機能は静止的実在としてとらえれば，機能停止狀態であつて意味をなさず，活動的・現象的にこそ本来の機能の概念としての意義がある。これを有機体の生命現象になぞらへてみると，有機体の中のある一器官だけが活動の役目をおこたる様な事があつてさえ，忽ちその有機体の生命現象は不順調になるか，又は停止のやむなきに至るであろう。かように建築の機能性は建築が何よりも人間の住行為の造形的空間として規定される故，その建築に住む人の住行為を活動的・現象的狀態においてとらえ，それが最も能率的に円滑になされるような働きの実現にかゝつている。それは最少限のエネルギーで最大の効果

をあげる為に各諸空間における機能の分析がなされ，それら各空間の単なる目的充足だけでなく全体としての空間を科学的・合理的な態度で具現されるのである。これを列記すると次の如くなるであろう。(6)

(1) 動線　人が建築空間で動くその軌跡が，標準状態において最も短かくかつ出来るだけ交錯しない様単純化する事が平面計画において考えられなければならない。

(2) 作業線　物の加工・処理・整理・運搬・收納等の順路を人の動線と合せ解決する事はあらゆる建築一般の主要な因子である。

(3) 動作域　動線や作業線は必然的にそれがなされる領域が予想されなければならない。しかしてその動作域は動線や作業線が能率的な可能性のもとになされる爲に必要な面積・形態・配置・出入口等の空間的処理がなされなければならない。

(4) 高性能的設備　以上三項目をより機能的にするために衞生・暖冷房・採光・照明・色彩・換気・音響・ガス・水道・家具等はもとより電気力・機械力の高性能的設備計画が可能な限りなされる事が必要である。

(5) 純粋機能形態　機能充足を建築表現の原理とする機能建築は実用性の重視で，材料・構造の直接的表現となり，機能以外の一切の付加的装飾も，又非実用的な伝統的因襲的な表現も拒否し単純な合理的・幾何学的純粋機能形態をとるのである。建築の機能性は建築を活動的・現象的機能体としてとらえ，その動的機能実現に科学的・合理的方法がとられるところに建築の合理性と合流するものである。從つて機能主義建築においても，依然として合理主義建築思潮における問題点が尾をひいているのである。かゝる問題構造を考察するために次の機能主義建築思潮をとりあげてみよう。

第二節　機能主義建築思潮

機能主義建築（Functional Architectur）の思潮の初期におけるとりあげ方は墺のワグナー「芸術はただ必要によつてのみ支配される」(1895)(7) によつて代表されるが，その必要とは即ち物的実用的な必要の意味で実用と美との一致，実用様式（Nutz Stil）を主張したもので，その建築観は直ちに既往様式の否定となつて現れた。実用と美との一致とは科学的・合理的・法則性を基礎とする実用的機能の充足によつて生れる建築こそ真の芸術として建築でそれ以上に付加的構築は実用的美の建築としては単なる虚飾にしか値しないとするものである。米のサリバン（Louis Henry Sullivan, 1856—1924）は生物学者ラマルク（Jean Baptiste de Monet Lamark, 1744—1824）の「使用廃用説」(1809)(8) からの公理「形態に常に機能に從う」（"Form euer follows function"）を機能美（Functional Beauty）なる概念に発展せしめた。

一般に実用的造品の形態はそれが果す機能によつて決定されるのが最も根元的な姿であろう。これを「純粋機能形態」と呼ぶ事ができる。然し人類発生以来の実用的造形品を観察すると純粋機能形態それ自体としての追求としてよりはむしろ何らかの外面的付加的装飾を施す事がなされ，そこにこそ実用的造形品が芸術的価値を帶び得る唯一の道であるとされ，それが最

高潮に達したと思われるのが,近世17～8世紀のバロツク（Baroque）・ロココ（Rococo）時代の建築・工芸であつた。

それは凡そ人間の可能な最大限の技巧的表現で，一つの作品を製作するのに莫大な時間と費用がかけられたものが多かつた。その様な生活造形品を受け入れ得るのは，それだけの経済力のある王候や貴族階級に限られたのは当然である。彼等はその様な人間の技巧の粋を尽した建築・工芸品を競つてとり入れ自分の地位の威厳を誇示するのに魅力的な力を発揮したのだが，一般大衆はその様な当時優れているとされていた高価な実用造形品からは締め出されてしまつて全く人間の階級的意識の醸成を促すのみだつた。所が18～19世紀にわたる産業革命以後漸次擡頭した機械はかような伝統的因襲を持たなかつたので比較的純粋な形態として発達して行つたのである。それが19～20世紀にかけて一応機械の大量生産方式確立と共に機械の威力は益々地歩を固めて行き，機械時代に育つ20世紀人は19世紀迄のアカデミツク（Academic）な造形品が欠いていた大きさ・単純性・清潔性・誠実性の魅力が，当時旧式の遺物に囲まれた生活にあきたらないと意識しつゝあつた人々を必然的に刺戟し，かゝる機械の機能形態の中に新しい美の理想を見出し，人間の科学的所産としての機械にも美しきもの，オブジエ（Objeet）として造形的芸術性を認めるようになつて行つたのである。かゝる機械的なものの讃美の思潮として1909年パリ（Paris）のフイガロ紙上に発表された伊のマリネツテー（Filippo Tammaso Marinetti, 1876—1944）中心の未来派（Futurism）宣言「我々は新しい美，即ち速度の美がこの世界の輝きを豊富にしてきた事を断言する」(10) に端的に表現されている。リチヤーズ（T. M. Richards, 1907—）は近代建築が工学と機械のデザインから——ドツクや高圧電塔や飛行機から——学んだ重要な事として三つあげ，(1)新しい材料を用いる技術，(2)線の簡素と表現の誠実さ，(3)工学が人知れずまた偶然であるかの様に用いた基本的な建築的特質，リズム・規模・対照の生み出す圧倒的な壮観である，と説明している。(11)

一体人間の美意識内容と云う物は越歴史的に一定の物でない事は留意されるべきである。社会的歴史的な潮流の色彩は常に塗りかえられている様に，人間の美意識内容も常に変化している事は具体的な史的事実が特語つているからには認めざるを得ない。今こゝに一つ具体例をあげれば，流体力学の科学的法則性が生んだ「流線形」（Stream-line）は重量及び構造からの形態（Form）であり，スピードからの機能形態である。この流線形に現代人は美意識を持つている。その無駄のない単純化された軽快なスマートさは新しい機能形態美の典型として現代人は受け入れている。燕とか鳩等の鳥の形態も単純な純粋機能形態美として感ずるのである。それでは機能に従う形態は常に必ず美しいだろうか？燕や鳩に限らずに鷲でも雀でもそれなりに機能形態を具えているし，或いは蛇でもみみずでも皆然りである。然し乍ら必ずしもそれらすべてを機能美として現代人は受取つていない。従つて機能と美意識とは一致する事もあれば無関係の事もあると云わざるを得なない。美意識内容は経験的な性格をもち，それは人間をとりまく生活経験によつて常に両構成（Re-construction）されていると見なければならない。それは今日の美は明日の醜になるべき運命を常に荷負つていると言う事である。そして既に機能主

義の運命は新たな再生をせまられているのである。こゝに機能即美の独断的性格が浮かび上つてくる。そこに機能主義の限界がある様に思われるのである。

建築が科学的合理性に基礎づけられた機能性を追求した。それらは現代建築の発展に大きな貢献をした。然しせまい「主義」と云う殻にとじこもる時必ずそれ以外の大事な物でも排除する傾向がある。極度の特殊化がもたらす悲劇，即ち「人間性」排除の悲劇である。建築の機能性は工学上の問題であり，建築としてはそれ以上のものである。これが建築家の絶ゆまぬ創造力発揮の問題である。機能性は芸術性の基盤を提供するもので手段としての意義を有するものである。

第三章　現代建築における国際性の問題

第一節　国　際　性

元来建築はそれが建てられる地理的・気候的・社会的条件に適応する様になされて来たので建築の材料や技術はこれらの条件によつてかなり個別的な傾向を具現してきた。そこから当然その地域独特の様式（Style）と社会的条件の歴史的変化にともなつて歴史的様式を持つている。国家は国家なりに，地方は地方なりに，ある時は流行の形態をとり，ある時は過去の歴史的伝統との断絶によつて新しい創造の形態をとつたりして，人間感情は変化して行くのである。日本の伝統的な和服が明治時代になつて急激に欧米の能率的な洋服に変化し始めてきたように，建築においては伝統的な木造建築に対して煉瓦建築，鉄筋・鉄骨コンクリート建築の受け入れがなされ，休息形式も坐式から椅子式に変化して行つたのである。この様な変化が進めば進む程，建築の個別性は漸次減少し，地域的な限界を超えて普遍的になつて行くと見る事ができる。この変化の原因としてあげなければならないものに，20世紀になつて高度に発展した科学技術の一般化にともなう知識・方法の一元化である。科学は法則性の追求によつて進歩し，かゝる法則性の理解は人類共通の能力であるため，一切の国家的或いは伝統的慣習からの束縛を出て発展し，それは統一的世界像への方向づけであり，客観性の確立であり，普遍妥当性への憧れである。これらの促進のためには各国人の意志が円滑に流通しなければならないが，科学は交通・通信機関の驚異的発達をもたらし急速に人類の空間的隔離感を消去してしまつたことが大きな力をなしている。現代建策の国際性はかゝる基盤の上に明確な性格をとらえる事ができるのである。

第二節　国際主義建築思潮とヒューマニズム

現代建築の発展は近代科学の発展に依存していると云える根拠として，現代建築の材料と構造の生産技術と工学理論との適応性が指摘される。この科学性は前述の如く建築の個別性を超越して国際性に統一される素地を構成したのであるが，これが建築思潮として明確に打ち出されたのは1925年独のグロピウスによるものであつた。当時の思想表現に使われた「国際」（Internationale）と云う言葉を現代建築の特性として具体性を与えようとして同年の彼の著

「国際建築」(Internationale Architecture, Bauhaus Bücher, I.) にその見解を明らかにしている。(12)

「現代の特性としての統一的世界像への動向は，個人的限界を越えて価値を客観化しようとする。現代建築の特徴は個人的なもの，国民的なものを客観化し，世界的な交渉及び技術は，現代建築を統一的世界形相に導き，民族，個性等の自然的限界を超えて国際的文化諸国に普及させる。建築は常に国民的であり，個性的であるが，三個の同心円一個人・民族・人類一の内で最後の最大なる円が他の二つを包括する。」

これは民族性及び個性を世界性の中に包含せしめうるとするもので，技術の一義的到達であり，世界主義的なものである。建築の合理性・機能性は国際的な基盤に立つて建築の客観的な発展のため「手段」として位置づけられるのである。つまりイズムの特殊化の難点はこゝに打解の道の一つが開かれたと云つてもよかろう。即ちこれを列記すると次の如くなる。

(1) 局限された一地方の様式の模倣再現でなく建築自体の合理的解決により，その働きとしての機能性を高めること。

(2) 個性の自由制作でなく，科学的な技術の上に立つ，合理的構法の成果である事(3)個別的手工業主産でなくて，世界共通の機械工業的生産によること。

国際建築思潮は更に1928年に結成された「近代建築国際会議」(CIAM, Les Congrés Internationaux d' Architecture Moderne) によつて益々発展し，今日に至つている。(13) グロピウス，ル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887—)，オウト (Jacobus Johannes Pieter Qud, 1890—)，ギーデイオン (Sigfried Giedion, 1894—) 等が中心になりスイスで第一回の会合が行われ「互に建築についての解釈並びに社会に対する職業的責務の根本的一致を確信し，各自国境を越えて相互にその制作において支持しあう」と言つた要旨の宣言がなされ 1956 年までに各地で会合を重ねる事 10 回に及び，現代建築の中心問題たる「住」環境の場の合理的・機能的探求は更にその「住」概念は都市計画を含むものであるとし，住宅・住区・都市等を超越した住の問題としてとらえ，「生活圏域的構成」的に討議が発展している。(14)

建築は何よりも人類に共通問題としてのかゝる生活圏域的住空間構成にこそ目的意識が向けられなければならない。国際建築の思潮は建築が人類共通の課題意識に立つもので，即ち建築におけるヒューマニズム思潮の現れであると云える。然しながらこゝで注意したいことは既に1939年にリチャーズが指摘している如く，(15) 新しい建築は感情の代りに理性に基づいて建築上の問題を解決したので，国境には関係なく国際的であるが，その国独特の気質とか理想・感情・風土・習慣・建築材料も持つており，それらの特質はそれぞれの歴史的伝統を持つており，その様な深い底のある国民文化の永山の一角的現代文化を現代建築が切りとる事はできない。可能なのは科学的合理的に解決され，是正される範囲内の事象に限られており，材料・形態・色彩についての本能的な選択表現は，いわば，人間の風土的社会関係的な感情的反応である。地域的ニュアンスと呼ばれるものである。人類が国際性を志向しつゝも，現実に国家が世界の単位になつており，その地域独特の絶対的な主体性は認めてられなければならない。これは人類

それ自体のもつ多様性に基ずくもので，こゝに自然との調和のヒューマニズムが指摘されるのである。人類の概念が多様性と同時に一様性を含む複合体の故人類の国際性を貫らぬくヒューマニズムは多様性を包括したものでなくてはならない。

第四章　現代建築における人間性の問題

第一節　建築とヒューマニズム

建築が建築としてあるためには板垣鷲穂が「生きたコンプレツクス（Complex）としての建築」(16) を説いている如くあらゆる要素の複合体的全体としてとらえられなければならない。各要素が全体としての統一体的存在においてこそ建築としての生命が具現されるのでのある。しかも「現代」と云う社会的背景をもつ建築の性格の把握は結局現代は建築にどの様な性格づけをなそうとしているかに帰着するのである。前章までに現代建築における合理性・機能性・国際性について述べ，それらの考察は必然的に建築における人間性の問題に到着したのである。従つて建築における人間性の問題は現代ヒューマニズム思潮の考察が基礎にならなければならない。

一般に人間性（Humanity）とは人間を人間たらしめている理念を意味すると同時に，生物学上の人間と云う種族に与えられている個々の性質を総括した概念であつて，単なる人間愛だけでなく純粋な積極的な人間的なものの承認・尊敬・促進への意志である。かゝる人間性なる言葉の本来の創始者は，キケロ Marcus Tullius Cicero, 106—43, B・C）であると云われているが，彼のフマニタス Humanitas）は理想的な意味の強いものであつてヒューマニズムが世界史的な意義における一つの思想的な形態をとるに至つたのは14～16世紀のルネツサンス（Renaissance）以来の事である。こゝにおいて中世封建制度の重圧からの人間性の解放が最大の眼目とされ，その爲には古代のキケロ的フマニタスの精神が再認識され，そこから単なる古代文化の再生でなく，自然における人間性の探究と發見と確立であつた。更にこれは第二のヒューマニズムとも云うべき18世紀の独に現れた「疾風怒濤時代」（Sturm und Drang）の文学運動等に顕著に見られる人文主義は，啓蒙思想の抽象的な悟性による合理主義と機械的世界観に対する反抗として現れ，古典的教養の尊重，人間性及び人間的個性の尊重ないしはその結果としての封建的市民階級の特権意識からの人間性の開放と回復を主張した。これがルネツサンスのヒューマニズムにおけると同様に自然哲学の時期に合致していたのである。そして現代になると，所謂現代的ヒューマニズムが切実に要求されているのが，それは現代的問題意識に基礎づけられるものでなくてはならない。現代が，単なる時間的客観でなく，現代の中で現代的問題を問題として意識し，その課題を自ら解決して行こうとする主体的な意識をもつ主体的世界である。この様な現代ヒューマニズムは先ず近代科学が生んだ機械及び技術による桎梏よりの人間性の解放がその一つである。自動的連続的生産のオートメーションのシステムと人間の価値ないし人間性の問題であり，原子力研究の驚異的発達と人類の福祉の問題である。第二には，科学的・合理的・機能的・法則的・客観主義的リアリズムは，人間のあらゆる慣習的なものを否

定し画一的・平均率的・中性的・人間機械観的思想を助長し，人間の感性的・感覚的・情緒的な個性的人間性の没却をもたらした事である。現代ヒューマニズムはかゝる束縛から人間性を解放し，全体的な人間性の確立をせまられている。それは問題意識をもつた主体的な人間性の確立であり，判断の主体を人間的実存におくヒューマニズムである。務台理作は全体的な人間存在の条件をぎりぎりにしぼつて (1)社会的条件（自然的条件ないし歴史的条件を含む），(2)実存的条件（人間の条件としての限界状況を含む）の二つにし，この二つの相反する条件の止揚綜合にこそ全体的な存在が規定されるとしている。(17) この様な全体的な人間存在の概念は，前述の建築の全体的把握の概念につながるものである。国際建築の思潮は人類としての共通性を基盤におくが，それはかゝる全体的な人間存在の概念におかれなければならない。

第二節　現代建築におけるヒューマニズムの方向

1907年，生活造形品の良質化と大衆性は美術と工業と手工作の協力によらなければならないとドイツ工作連盟（D. W. B., Der Deutsche Werkbund）が発足し更にこれが1919年グロピウス創設のバウハウス（Bauhaus）によつて新しい方向は明確になつた。バウハウスは一種のデザイン綜合大学で，綱領に「すべての芸術的制作を統合し，すべての工作技術と工学的訓練とを一つの新しい建築のもとに再統合しようとする」(18) とある如く時代の感情たる建築に世界感情の総ての芸術及び技術を包含する綜合芸術の位置を与えたのである。一例を1925年のデッソウ (Dessau) バウハウス校舎に見る如くグロピウスの作品はリチャーズの言葉を借りて言えば「極端な ―ほとんど近づき難い― 厳格なといえる程合理的なものだが然しあらゆる部分が完全に調整され，徹底的に律動的に設計されていて，もつと幻想的な様式でさえ稀にしか成就し得ぬような一種の高貴さを建物全体に与えている」(19) ものであつて単に工学的な計算だけでは眞に芸術としての建築は生れず，それらの認識はもとより，それ迄等閑視されていた造形的視覚性の配慮によつて新しい建築における人間性をみるのである。バウハウスの教育計画は構成教育の基礎課程から各工房における実習を経てから最後の建築課程へ進む様になつている。幾何学的視覚性による統一的建築美の表現はあらゆる工学的でありかつ知識の裏付けと構成的感覚を必要とし，かくして単なる付加的装飾的要素と云うより，更に内的な，人間性の配慮のあらわれであるとみなす事ができるものである。

次に幾何学的・合理的な形態に対して有機的建築（Organic Architecture）を主張する米のライト（Frank Lloyd Wright, 1869―）をあげなければならない。人間の住空間は自然から遮断された空間の中でなくて自然空間の中に生活するものである故自由なプランによつて内部空間を外部空間へと延長されなければならないとするものである。1953年ライトは有機的建築のための用語（The Language of Organic Architecture）を明らかにしているが (20) この建築思想が，ヒューマニズムの思想につながつている事は見逃せない。

自然は内的な大自然である。それは材料のもつ自然的感情としてとらえるヒューマニステツクな見方の端的な表現である。機械的なものからの人間の解放の主張のヒューマニズムは自然

の思想と結びつく。これについて阿部公正は「自然から抽象された人間の主張する単なる人間主義ではなく又単なる自然主義でもない。自然と人間の融合をめざす方向へ発展させられるのは当然である」と説いている。(21) 従つて建築は自然から隔離された作品として成立するのでなくして周囲の自然をも含めた生活空間構成として成立するものとしてみられる。ヒューマニズムは又歴史的な伝統・形式よりの解放であるが，それらの否定ではなくて新しい形式の創造における伝統の再構成に本来の立場がある。ライトは有機的と云う概念を綜合的・内在的実在としてとらえた。部分と全体との綜合としての実在である。サリバンは「形態は機械に従う」としたが，勿論それは当然であろう。然しそれは低い段階におけるもので，精神的には意味がない。建築物形態がやがてやすらうべきものとしての骨骼的意義においてのみ価値を有している。骨骼は人間の究極ではない。骨組をがちやがちや鳴らすだけでは人間的な暖味は感じられないだろう。それは冷やかで,極めて殺風景でひからびており内的生命感に欠けている。形態は機械に規定されるが，詩的創造力がそれを破壞することなく同調しうる限り，形態は機械を超越するものであろう。草木の開花は美しい。その美しい花は茎の上に置かれたものではない。その茎から生じたものであつて．それは内在的生命の発現に他ならない。装飾は内在的情緒的な限りにおいてポエジー（Poésie）となる。かくしてライトは建築の人間的空間は詩的空間にありとする。メカニツクな建築創造の原理において人間が単なる生理的・中性的な存在であればそれで解決されるであろう。然し人間の全体的存在をみた場合，人間の知覚的・感覚的・感情的・情緒的な面の無視は逆につくられた建築が不当にも人間を束縛する事になろう。機械的合理的所産たる建築がそれ自体を究極の原理とする限りにおいてはこの悲劇はくり返されるであろう。従つて創造的な建築が機械化に仕えるのでなく，建築の機械化が創造的建築に仕えるようにしなければならない。建築における合理性・機能性の追求は結局人間が住む建築の詩的空間構成の手段的な限りにおいて偉大な意義を有するものである。かゝるライトの思想と共通する建築家としてル・コルビュジエをあげなければならない。

彼は「家は住むための機械である」と1920年雑誌「新精神」(L'Esprit Nouveau) に発表した。更にそれは1923年「建築芸術へ」（Vers Une Architecture）として刊行されたがそれを二つに要約してみると次の如くである。(22) 「見えざる眼」（Les yeux qui ne voient pas）なるタイトルで自動車・飛行機等の高級な技術力・機械的経済法則計算の生んだ新しい明快な印象的な造形美の新精神を強調し，忘れられた19世紀の先覚者の合理的機能美を現代に持続させるべき事を指摘し，建築はそこから過去の様式に従う事の無意味性を説き現代において日々に現代人の様式を定めつゝあるのに一般の眼は不幸にしてそれを鑑別し得ないとなげきかつ啓蒙している。(2)技術家は科学的法則の計算によつて工業生産のもとに，家屋の連続生産と設計の規格を促すが，それは補助手段であつて，建築家はこの新しい精神を理解し，感性的にも理性的にも従来の固定せる意識を打破し純粋な創造によつて形態の均整な表現をし，効用性の彼岸における量の統合・比例感覚によつて建築創造の情熱は生命のない礫石からドラマを作り出す。プランは内部より外部に及び，外部に内部の生んだ結果である。そしてエレベーションは既存

のあらゆる拘束から離れて自由でそこにこそ建築家は芸術家にもなれば或は単に技術家ともなる，と指摘している。

一般にル・コルビユジエを単なる機能主義建築家とみなしがちだが，当時の一般大衆の偏見的固定建築観を一掃する使命として画期的なものであつて，上述の第一の要旨がそれであるが，一方彼自身は第二の要旨にある如く，又実際の多くの作品にも見られる如く建築を単なる機械に過ぎぬものとは考えず，純粋な芸術であつて，浮揚する様な力の平衡状態や軽快性や開放性の造形的詩的空間創造であつてそこに単なる冷厳な科学的計算以上の人間味を生み出している。1930年著の「闡明」(23) において「建築とは精神が作品の堅固を保証し，或は安楽の要求を満たす事に設頭せしめられた後に，単に役立つことよりは一段と高い意図に支持されるもので，即ち建築的イデーとしての抒情的力を表明しようと志す」とその詩的空間創造的事象を説明している。そして彼の社会的構想力は CIAM の生活圏域構成における住の問題を実践でもつて示し大都市の混乱に対し新しい都市生活の人間化に努力を向けている。今日無計画な大都市程極度に人間を逆に圧迫している。都市が単なる部分の集りだとみなした事に起因している。現代建築における人間性の方向は常に生長・変化する動態的住生活圏域統合体の詩的空間創造体系にありそれは未来にまでつながるものである。

註

(1) 星野昌一：建築意匠，1949，P.45
(2) 田辺　泰：西洋近世建築史要，1952 P.P65—77
(3) 同　　：同書 P.129
(4) この実験住宅は1927年 Gropius の提案により Georg Muche 設計で指導は Adolf Meyer が担当した。
(5) 蔵田周忠：グロピウス，1953，P.P39—41
(6) 星野昌一：同前書，P.P53—54
(7) 田辺　泰：同前書，P.66
(8) 同　　：同前書，P.234
(9) M. Lamark : Philosophie Zoologique, 1809 (小泉丹・山田吉彦訳)
(10) S.Giedion : Space, Time and Architecture, 1941, (太田実訳,1955,P.475)
(11) J.M.Richards : An Introduction to Modern Architecture, 1939, (桐敷真次郎訳.1952,P.56)
(12) 藏田周忠：同前書，P.P30—31
(13) 同　　：同 前書，P.P44—48
(14) 雑. 新建築，9,1956
(15) J.M.Richards: ditto., (同訳,P.P163—165)
(16) 板垣鷹穂：〔講座〕建築美学 (1) 雑.国際建築，5,1955，P.P25—27
(17) 務台理作：現代の意識とヒユーマニズム，雑.世界，8,1956，P.P9—18
(18) 山脇　巌：バウハウスの人々，1954，P.P7—10
(19) J.M.Richards : ditto., (同訳，P.P148—9)
(20) 天野太郎他編：フランク・ロイド・ライト1954,P.P156—157
(21) 阿部公正：デザインとヒユーマニズム，雑.工芸ニユース，2,1955,P.P8—12.
(22) Le Corbusier : Vers Une Architecture, 1923,(宮崎謙三訳,1929)
(23) Le Corbusier : Précisions—— sur un Etat Présent de l'Architecture et de l'Urbanism, 1930.

(1956.12.3.)